

編集後記

○梅雨明けとともに酷暑到来、今夏こそガンバルゾーとの意気込みも、原稿用紙を前に青菜に塩の状態、夏休暇中の静養を命じられた湯之上先生ともども、肝炎患者はオンミタイ

セツにがモットーであります。そんなつれづれ、近時ナウイ変身をしたと評される朝日ジャーナル7/20号を見ると、「女子大生・虚飾の栄光」とか「男性優位社会の新しいセックスシンボル」などというタイトルで特集あり、「経済大国に咲く女子大生文化の背景を探ってみた」と、「女子大生」という特殊用語（「男子学生」という語はあるけれど、「女子大生」という用語はないから、ある偏見に基く用語という外ないであろう）を用いて、「女子大生」なるものの風俗的論評をしている。朝日ジャーナル的良識を時に見せているが、所詮「テレビや週刊誌が伝える「女子大生」の風俗的現象を対象とした浮薄な論評に過ぎないと思う。私どもの目の前にいる文教の女子学生諸君は、人間としての生き様を模索しながら、この夏休暇中も日夜研鑽を重ねているように見受けられる。図書館も連日満員である。ここ数年途絶えていた奥のほそ道

行脚も復活するそうであるし、先生方の話し合いの中にも、講義や演習の過程でも、新しい文教の女子学生像が誕生する胎動を感じ取る昨今である。とあれば、我ともに再生すべしとの思い切なるものがある。

○三迫初男先生が、本学を本年三月御退職なさった。先生には、広島大学総合科学部教授を停年退官されて直ちに本学に御赴任下さった。故西谷登七郎教授の後任として、漢文学と文学概論の講義を担当していただいた。先生には、俗事に拘泥することなく春風胎蕩たる温顔で学生に接して下さり、難解な漢文を面白く興味ある方法で解説教示して、学生を魅きつけておられた。本年は、先生の古稀を記念して「漢語漢文の世界」二冊を発行することができ、これも先生の学徳のいたすところと感銘するところである。今後の先生の一層の御加餐を祈念するものである。

○本年四月、田辺健二先生が鳴門教育大学に栄転された。勤続十二年、その間に、専門の近代文学の研究と教育に専心されると共に、校務としては教務主任・広報文書主任・学生部長などの要職を歴任され、常に本学で手薄な部門を主導し続けて下さっていた。先生は、極めて先進的思想を堅持しながら、絶妙

なバランス感覚をもって多くの人々の意見を集約しながら、もっとも妥当するところに人々を導いておられた。そうなるには、先生の円満な人柄が人々の共感をさそったという面が強かったと思う。そうした先生を、今本学が失うことは何よりも大きな損失であるが、今は新天地での一層の御活躍を祈るばかりである。ともあれ、先生が本学に新任としておいでになった時の歓迎会の席上、宴正に終らんとする時「オーイ、酒がタリンゾー。」と大声疾呼されたという新人らしからぬ逸話とともに、先生の業績は本学で語り継がれることであろう。

○また、河村昭一先生も、本年四月兵庫教育大学へ御栄転になった。本学の教員組織の変更に、国文学科の一員となっていたが、担任もしていただいていた先生は、元来国史学が御専門であり、殊に中世大名（朝倉家）の研究者として注目を集めておられた。本学離任後刊行された「武田一族」（祇園公民館刊）は、斯界で高い評価を受けている。これも、本学在職中、刻明な文献調査と周到な実地踏査によって成就された御業績である。本学での御在職は九年であるが、その間温厚な人柄と鋭利な学究心をもって学生の指導に当って

下さるとともに、広報文書の主要な仕事を一手に引き受けて、広報活動を活性化させて下さった。惜しみて余りある人ながら、今線言は詮ないこと、先生の今後の一層の御活躍を祈るものである。

○田辺健二先生の後任として、綾目広治先生が新しく赴任された。綾目先生は、広島の修道高校を御卒業後、京都大学経済学部に進学同御卒業後東芝に御就職、いわゆる大企業のエリート社員として栄光ある未来が約束されていたのであるが、向学の念止みがたく、大学時代論文を読んで感銘を受けていた磯貝英夫教授（広島大学）の門を直接たたき、大方向変換をして広島大学文学部の研究生を経て広島大学大学院文学研究科国語学国文学専攻に入学、小林秀雄を中心とする文学評論の研究を深められた。博士課程二年の時、本学の要請を受けて、近代文学担当の講師として来て下さったのである。新進気鋭の学究であり、今後本学における活躍が期待される。

○この四月から、曾田文雄教授も本学国文学科の一員として名を連ねて下さることとなった。曾田先生は、旧制松江高校を経て京都大学文学部を御卒業後、滋賀大学などの助教を歴任され、今春まで島根大学法文学部の国

語学担当教授として御活躍されていた。ところが、先生の御実家は出雲市の名刹大安寺（浄土宗）であり、その後継者であられる先生は諸般の事情から島根大学の教授の職を退かれることとなった。そのことを仄聞した本学では、御無理を承知の上で強請し、先生に国語学担当の教授としてお名前を連ねていただくことができるようになったのである。先生は博学多識、古典語に精通されており、その多彩な業績は学界で推重されているところ、本学の小川輝夫助教授も曾田先生の御推輓によって御就任いただいたのであるが、今後とも本学の研究と教育の充実のため御貢献下さることを願っている。ありがたいことである。

○「文教国文学」も、号を逐って充実している。しかし、本当は卒業生諸君の論考が中心となるようになって、「文教国文学」が一人前になるのである。一日も早くそうなって欲しいと思う。そうなれば、「女子大生」などという呼び名が雲散霧消するにちがいない。「男子学生」に対する「女子学生」になるのである。文教の「女子学生」諸君、「脚下照顧」して大鵬の志を持つとう。（横山）

文教国文学 第十五号

昭和五十九年九月二十五日印刷
昭和五十九年九月二十九日発行

（非売品）

編集者 広島文教女子大学国文学会

代表 湯之上 早苗

発行所 広島市安佐北区可部町上原

一二三八

広島文教女子大学

国文学研究室内

広島文教女子大学国文学会
（振替）広島六一三四八九四

印刷所 溪水社